

大学職員情報化研究講習会～基礎コース～ 研修レポート

(E-2) セブンス

【タイトル】

学生支援に対する情報の活用 ～「能動」へのキッカケ作り～

【課題認識】

テーマとしては、教職員と学生がいかにして関わりを持ち学生の意識を改革出来るかである。それに対して職員として何が出来るのかがここでの課題となる。大学間で共通している問題としてあげられる学生の学習意識の低下が何故起こっているのかを考えた際に、受動的な姿勢ということがまず提示された。例えば、勉強に関しても就職活動に関しても誰かがどうにかしてくれるだろうという姿勢の学生が多く見られる。自分で授業の組み立てが出来ない、せっかく大学に入ったのに授業に来ない…その結果、自発性の無い学生が増えているということ、また、窓口に来ない学生を来させるにはどうしたら良いかという問題に着目した。

【討議内容】

近年の学生に見られる傾向として、受動的な姿勢が挙げられる。そこから学習意欲の低下や学力低下にもつながっていると考えられた。このような学生は社会人力・学士力が低下しているのではないかと思われる。

社会人力について、まず社会人力とは何かという点から討議が進められた。社会人力とはコミュニケーション力、問題発見・解決能力、責任感、協働感、自発性が挙げられる。学士力として、今回は教育目標を達成することにより得られる力と定義づけをした。

社会人力と学士力を身に付けるための支援を職員としてどのようにしていかなければならないのかを論じていく。各力に対して出来ることを挙げていく中で何もかも職員が学生に対して与えるのではなく、学生が能動的に動けるような「キッカケ」作りこそ職員がすべき支援であるという討議に至った。

【提案内容①】 社会人力支援のために出来ること

社会人力を向上支援するためには、まず職員側も学生のことを知る必要がある。そのきっかけ作りとして自己分析シートと学生カルテの利用が有効であると考えられる。

- ・自己分析シート…学生が自己分析・目標・将来像を記入するシート

- ・学生カルテ…自己分析シートを基に教職員間で作成し、面談等を通して書き加えられる

連絡の取れない学生・窓口に来ない学生に対して、相談等をするきっかけを作る糸口として初めは強制的ではあるが、自己分析シートの未提出を防ぐため履修登録の際に提出してもらう。そこで職員と顔を合わせることによってコミュニケーションを取り、自発的に窓口足を運ん

でもらうきっかけを作ることが狙いである。

きっかけを作った事後のメリットとして学生が無意識的にはあるが、履修登録の度に過去の振り返りが出来、職員側もその学生に合った情報提供をすることが出来る。コミュニケーションを取る機会や学生が自己を振り返る場を提供することにより社会人力向上支援のための足がかりとなる。

【提案内容②】学士力支援のために出来ること

シラバスの有効活用

- ・履修登録と同時に必読させる
- ・シラバスに授業の課題や資料を添付する

一般にも公開することでこの大学が何をやっているのか理解してもらえるシラバスを学生にも有効に使用してほしいので、履修登録や課題・資料を利用してシラバスに目を通すきっかけを作る。まず履修登録の際に自分の取りたい科目を選択するとシラバスに飛ぶようにし、登録の前に授業内容が確認出来るようにする。次に授業登録後、授業の資料や課題をシラバス内に添付することで毎回授業の度に確認を欠かせない状況を作る。この授業資料や課題は繰り返していくことで予習の習慣や自分で確認する作業を自然に身につけることが出来る。シラバスを見ることで教育目標の理解にもつながり、予習の繰り返しや事前準備のくせをつけさせることで学生を能動的・自発的な姿勢に導く。

【グループ討議・発表を通して】

発表の中で次の二点の質問が出た。

- ① シラバスに資料等をつけるということだが、パソコンの使えない教員はどうするのか？
- ② web履修を実施している場合、紙ベースの学生カルテをどのように全員提出させるのか？

①に関しては、今回の狙いがシラバスに目を通してもらうこと・自分から何か情報が入っていないか調べる習慣をつけることなので、継続して資料やレジュメを添付していくのかは教員にある程度一任となる。②については学生カルテを事前に事務室に提出することで履修登録用IDがもらえる等の流れを作る。提出してもらう上で学生カルテがweb上のものになってしまうと事務職員との顔合わせを目的としている、今回のテーマである「キッカケ」作りにはならないので、学生全員が関わる履修登録と何かしらの形で学生カルテを連携させていくことが重要である。

グループ討議を通して、各大学の課題が共通していること・その課題に対する取り組みや考え方を認識することが出来た。また、情報を活用していくことで学生へ自発性を促し、積極性を持ってもらえるような取り組みの可能性を感じた。そのために大学職員がどのような姿勢で業務をしていかなければならないかという意識も共有・自己の中で再認識出来たのではないだろうか。